

私達の会は去る八月二十日、水郷汽船に乗って、「霞ヶ浦の水を観察する集い」を催しました。

高村先生は、その際、講師としてご出席下さり、霞ヶ浦の歴史、周辺の人々とのつながり、汚染の現状、汚染の原因、霞ヶ浦の将来等について詳しく説明して下さいました。

「汚れゆく霞ヶ浦」は、その際にお話し下さった内容を、原稿にまとめたものです。

◇特別寄稿

汚れゆく霞ヶ浦

高村 義 親

一、霞ヶ浦の昔と今

鎌倉時代、霞ヶ浦はまだ広い海であった。太平洋の荒波が直接ぶつかる鹿島灘を「外の海」と呼んだのに対し霞がたちこめたように見える、波静かな霞ヶ浦は、

「内の海」と呼ばれた。「内の海」には多くの良港があり、外の海との往来がさかんであった。その頃、浮島や潮来では海草を焼いて塩をつくっていたという。当時石岡に国府があった。上方との往来は高浜の港から舟で出島に渡り、出島は馬で横断して再び舟に乗り、今の土浦入りを渡って馬掛に上陸した。そこから江戸崎、竜ヶ崎を経て下総に向ったという。

鹿島、香取の神社参拝も重要だったので、高浜から上船し鹿島に向ったのだ。「東は海、北は山であるから魚も塩もたやすく得られるし、原野は至る所にあるから桑や麻の栽培に適する。つまり、この国は水陸物産が豊富で無尽蔵といってもよい理想の里」と「常陸風土記」に書かれている。

昔から霞ヶ浦は一般交通、物資の輸送、漁港、製塩、農業、牧畜などあらゆる生活の要の位置をしめていたのである。この辺のことについては豊崎 卓さんがくわしく研究されており、貴重な資料をおもちのようである。現在の霞ヶ浦は「内の海」といわれた頃の霞ヶ浦とは